

小学校教師による小5社会科“森林資源”の教材研究—1枚の写真を通して

## 四万十川の豊かさを守る源流域の森林

作成：山中幸蔵（やまなか こうぞう／高知県梶原町立越知面小学校 教諭）  
寸評：山下宏文（やました ひろぶみ／京都教育大学 教授）\*

語り：「この写真から、どんな音が聞こえてきますか。鳥や虫たちの声が聞こえてきますか。これは、高知県の四万十川の源流域にある山林の写真です。

四万十川は最後の清流と呼ばれています。現在四万十川には150種を超える魚が生息しています。その川の豊かさを支えているのが、源流域の森たちなのです。森から送り出された栄養分が川の虫や魚たちを育ててくれます。しかし、この森の木の周りには、草も生えていません。木の根本は、むき出しになっています。このことは、土砂の流出を物語っています。ここから流れ出す小さな谷は、雨も降っていないのに、にごっています。自然の営みの中でつくり出された栄養分を蓄えることが、できなくなっているのです。小さな谷は集まり、沢となり、やがて本流へと流れていきます。雨水をためて川に少しずつ流す働きをしているこの土砂の流出のため、四万十川の水位は、ぐっと



◀草も生えていない林の例

下がりました。このことは、水生生物や水辺の生き物の数に大きな影響を及ぼしました。このままでは豊かな流れを育んできた四万十川の危機です。川の豊かさを取り戻すためには、川本体だけではなく、森を見つめなければなりません。

今、源流域にある梶原町では、人と森が共生していることを認めた「FSC」の森があります。森は、放置していても豊かな森にはなっていない。人が入り、育てることにより、豊かな森へと成長していくのです。豊かな森をつくるのが、豊かな川の流れを取り戻すことにつながります」

意図（山中）：日本は森林や原野に囲まれた島国である。そのため、第一次産業である林業に昔から大きな恩恵を受けてきた。しかし、外国の木材の輸入や後継者問題などから、林業の衰退が激しく、植林されたまま放置された人工林が多くなった。そのことは自然環境や生態系に大きな変化をもたらしている。この学習を通して、身近な森に興味を持ち、森林に入り、豊かさや問題点を知り、どのように森林とかかわっていけばよいのかについて考え、森林と共生しようとする実践的態度を育てたい。

寸評（山下）：小学校社会科では、この20年間近く国土保全や水源かん養に果たす森林資源の重要性を取り上げてきた。こうした機能に着目すると、どうしても人工林への着目が薄くなってしまふ。ようやく最近になって、人工林へも注意が払われるようになってきている。温暖化防止に果たす森林の役割が浮上してきた関係もあろう。しかし、日本の森林面積の4割を占める人工林に対する現状の認識は、まだまだ不十分である。まず、この写真教材のように、現状をしっかりと把握することが必要なのではないだろうか。

\* 〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1 Tel 075-644-8219（直通）